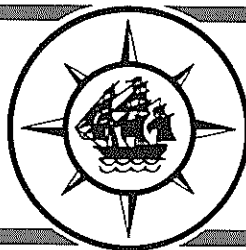


# Operation Raleigh News



## Operation Raleigh

DENSO

### No.34

昭和62年(1987)8月10日(月)  
毎月1回発行

●発行所 オペレーション・ローリー日本委員会  
〒104 東京都中央区築地1-7-10 築地オーミビル502号  
電話 東京(03)544-7413

●このオペレーション・ローリーニュースは日本電装株のご協力で制作されたものです。

# ありがとうのエアールを交換 すばらしい友情と体験・日本フェイズの幕閉じる



▲全ベンチャーそろって記念撮影(富士山麓朝霧高原)

## 充実した90日間が終り 新たなチャレンジが始まる

7月1日の富士登頂を果たし、東京に移動したベンチャーたちは、3日「オペレーション・ローリー日本フェイズ記念国際フォーラム」に参加しました。このフォーラムでは日本フェイズの意義と、外国人ベンチャーの体験した「異文化・日本」の検証に主眼が置かれ、講師の各氏は次のようにコメントしました。矢野暢氏「今の日本にない伸びやかな自由観を与えた」木幡和枝さん「この膨大な情熱やエネルギーが必ず今後の新しい交流の役に立つ」中沢新一氏「異質なものに心を開いて上手に旅することを知った」祖父江孝男氏「今回の外国人とのコミュニケーションで足りなかったものは必ず次の対話に蓄積されていく」4月から3ヵ月にわたって日本各地を舞台に展開したオペレーション・ローリー

日本フェイズは全ての日程を終え、海外から参加した約100名の若者たちは数々の思い出を胸に帰国。日本人ベンチャー20名も日常に復帰しました。また大任を果たしたトニー・ウォルトン日本フェイズ運営本部長も、「これだけの数の外国人が日本で日本各地を訪れ、ボランティア活動をはじめとした地域の様々な活動に参加したことはなく、その活動の成果は今後いろいろな場面ではっきりしてくることでしょう。多くの日本のみなさんにお世話になり大変感謝しています。」というコメントを残し帰国の途につきました。そしてベンチャーはもちろん、この活動にかかわったすべての人の胸には、目的達成の充実感とともに、フォーラムで挨拶した日本電装の田辺副会長の言葉どおり、日本フェイズは終わっても、これからひとりひとりの新しいオペレーション・ローリーが始まるのだという実感が湧いてきました。

「さようなら」ではなく  
「また、会いましょう」

ORJC委員  
日本電装株取締役副会長 田辺 守

日本での厳しく波瀾に満ちた探検を終えたベンチャー諸君、諸君のご両親にみなさんが無事帰還したことを報告することができ、大変うれしく思っています。

日本フェイズでの活動を通じた国境を越えての友情の輪は、いまはまだ小さい輪ですが、将来無限に広がる可能性を秘めています。なぜならたとえ見かけは異なっても、私たちはお互いに人間以外の何ものでもないからです。

オペレーション・ローリーの探検に参加した諸君が同じ理由で新しい視野、そして新しい見方で、自分たちの家族、町、国を見てくださるようになることを楽しみにしております。国際的な友情、協力というのは諸君が諸君のまわりの人々を大切に思う気持ちから始まっていくものなのですから……。

諸君が各々の国に帰られたら、諸君自身の新たなオペレーション・ローリーが始まることと思います。そして、日本電装からも新しいオペレーション・ローリーが始まることでしょう。私はここで「さようなら」ではなく、「また、会いましょう」と申し上げます。そしてこの世界のどこかでまたお会いできることがあれば、「ありがとう」と声をかけたいと思っております。



●フォーラム終了後ベンチャーから花束を受ける田辺ORJC委員

# 日本フェイズ参加者アンケートから

## 海外青年が見た異文化ニッポン

オペレーション・ローリー国際フォーラムは、日本フェイズを記念して、外国人ベンチャラーの日本での体験報告を中心に展開しました。日本での異文化体験、日本での国際交流、日本での自然体験について、彼らは自分たちの感じたことを、思い思いに語ってくれました。彼らの発言に日本人が改めて日本について考えさせられる場面もあり、講師の各氏も彼らが実に日本を良く見ていることに感心していました。そこで帰国を前に外国人ベンチャラー対象に実施した、日本フェイズ参加後アンケートから、彼らが体験を通じて、日本の文化や社会、そして日本人をどのように理解し、位置づけたのかその一部をご紹介します。

——日本フェイズへの参加理由は？

世界における日本の影響力がどんどん大きくなっており、日本について（日本の人々、習慣など）知る良い機会だと思いました。

（北海道／K. パーチさん・英国）

——日本人の一般的な印象は？

日本人は私が今まで会った中で最も寛大で友好的な人々です。ただ一



部の人々が恥かしかって心を開いてくれなかったことが残念です。

（本州／R. リビングストーンさん・英国）

シャイで保守的に見えました。しだいに打ちとけ大変友好的でした。

（北海道／I. ロバートソンさん・英国）

私のホストファミリーは「言葉が通じなくても目や心でコミュニケーションできます」と言い、実際にそうして仲良くなりました。日本人はとても親切です。ただ、所かまわずゴミを捨てる自然愛護の精神の無さは、感心しません。

（北海道／M. オブライエンさん・ニュージーランド）

日本人はハード・ワーカーで規律正しい面と、切り替えの早さという

二面性があると思いました。また時に日本人が本心を出さないことで、がっかりすることもありました。

（沖縄／D. ウィティさん・カナダ）

——驚いた日本の社会現象は？

日本のハイテク・イメージにもかかわらず、多くの伝統的な作業訓練が残っていること。

（I. ロバートソンさん）

現代も日本の家庭に、細かい規則があり、人々が大変礼儀正しいこと

（本州／C. アッシュワースさん・英国）

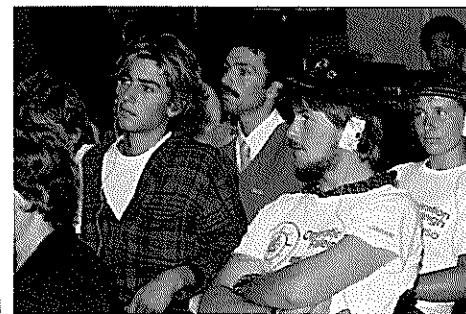
——今回の体験で得た日本観は？

日本がこれほど西洋の影響を強く受けているとは思いませんでしたが日本の伝統と西洋の生活様式はうまく溶け合っていると思います。

（M. オブライエンさん）

伝統的な東洋文化を残しながら、近代的社会を築いていく国という印象です。

（T. ヤングさん）



帆船ゼブ号はダーウィンからインド洋をセイシェル諸島に向かって航海中ですが、そのゼブ号の今後のスケジュールが英国本部から発表されました。セイシェルに到着した後のゼブ号の日程は以下の通りです。

●9月14日～11月30日（ゼブ12G）  
セイシェルで新メンバーと交代。日本からは江頭英雄君と一矢好彦君が乗船し、モンバサ（ケニア）、ダルエスサラーム（タンザニア）、ダーバン（南アフリカ）などを經由してケープタウンへ入港。

●11月30日～2月16日（ゼブ12I）  
ケープタウンで新メンバーと交代。日本代表は関貞子さん、海上英治君の2名。南大西洋を西へセントヘレナ島、マルチンバズ諸島などを経てリオ・デ・ジャネイロへ。

●2月16日～5月4日（ゼブ13）  
リオ・デ・ジャネイロで新メンバーと交代。以降日本からの参加なし。ブラジル国内のサルバドル、レシフ

## 英国本部NEWS

ェ、ベレム、アマゾン河口、カエンヌ、スリナム、ガイアナを経てトリニダード島へ。

●5月4日～7月20日（ゼブ14）  
トリニダード島で新メンバーと交代



し、ウィンドワード諸島、リーワード諸島、プエルトリコ、バーミューダ島を經由してアゾレス諸島へ。

●7月20日～9月25日（ゼブ15）  
アゾレス諸島でメンバーを交代し、リスボン、サウスアンプトン、ジャージー、ガーンジー島を経て、英国プリマスへ。

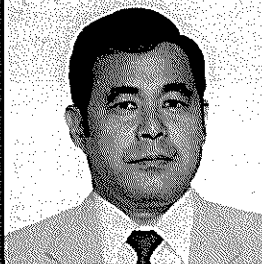
### 旗艦SWR号

#### 母港ハルに帰還

旗艦SWR号は6月中旬リスボン港に5日間滞在し、盛大なレセプションを行ないました。同艦に乗り組んでいた12人のベンチャラーたちは駐ポルトガル英国大使からお茶に招待されたり、リスボン市内の観光を楽しんだりしました。

SWR号は6月15日にリスボンを出港。ジャージー島、ガーンジー島を経て、6月30日母港ハルに帰還しました。

# いま、私たちは ひとにぎりの種子を 播きおえた。



オペレーション・ローリー  
日本フェイズを終えて

オペレーション・ローリー  
日本フェイズ実行委員長  
寺下 英明

## 21世紀は はたしてあるのだろうか

いま、激動の世紀を終えつつある地球社会に、平和と繁栄の21世紀は「あるのか」という問いが投げかけられている。これまでの長い人類史に、民族や国々の対立抗争はたえず、戦いや悲惨なしらせは、いくたびも世界を駆けめぐり、膨大な血と涙が流されつづけた。しかし幸いにも、地球社会全体の破壊には、いたらなかった。だが、21世紀は、はたしてあるのだろうか。核の究極恐怖に加えて、世界を覆う社会変化の巨大潮流が、営々と培ってきた各地域の多彩な自然、文化のすべてを急変させ、あるいは消滅させ、人々の心のうちなる信頼と連帯、共存の哲理をぶちこわしゆく可能性が指摘されている。本格化する国際化の時代とは、その言葉の未来性と表裏に、人々の心奥を打ちすえる、荒々しい熱線を射るのである。その危機と困難をのりこえ、人々が心を開き、手をつなぎ、力をあわせるために、未来の地球社会をあらしめるために、現代の地球社会がなすべき先行努力と責任は、いよいよもなく大きい。この時代に生きるものは、次代に生きる若者たちの力を信じ、その覚醒と啓発のため、国々の境をこえる大いなるムーブメントをおこさねばならない。世代への希望であり、未来への祈りである。

## 心を開く、共存の ユートピアを共感しあえた

オペレーション・ローリー日本フェイズへのとりくみに際して、身内に湧きいでた、戦くような感動を思いおこすのである。そして、この日本フェイズはこれまでの諸国フェイズに比べ、若者の心のうちなるチャレンジをテーマにし、日本文化、日本の人々との心の交流を、諸

計画の基本とした。英国本部と連携し、オペレーション・ローリー日本委員会、実行委員会、日本電装を中核とした、すばらしい人材集団が、その直接の責任を負い、全国の多数の行政機関、企業、団体、そしてボランティア集団や、個々の市民の方々に、全力を投入していただいた。より正確には、この事業本質に感応の瞬間、お互いに、はげしい共感集団として共鳴しあい、自らの歌をうたいあって、その持てるエネルギーと、好意をすべて投入しあったというべきであろう。そしてこの年、世界から来訪の100人の若者、この逞しいベンチャラーを、ひとつの絆として、日本フェイズにかかわった幾千の人々、見まもり支援していただいた全国の人々は、すべてがかつてない感動と想いをもちあい、貴いものを受けとった。つきつめれば、心を開く、共存のユートピアを共感しあえたということであろう。その感動は、この列島のすみずみに波及し、そしていま、帰国してゆく若者たちにより、この地球社会の全域に送りとどけられつつある。

## ヒューマニズムの体得と ユートピアの原体験

オペレーション・ローリー日本フェイズの成果の総体は、やがて歴史が黄金の文字で書きしるすとしても、ここにとても語りつくせなく、厚く、広く、そして貴い。私は、あらためて、すべての人々によびかけたい。ゼブ号が波濤をこえて持ちこみ、知床の雪に汗とともに残されたものは何か。ラウスの人々がひろげた胸の中にあったもの、足助の少年が別れに叫んだもの、木曾川の老人がつかえ、高野のひじりが語ろうとした言葉は何か。サバニに打ちかかったハーレーの波、西表ムーンビーチの風呂にはぜた炎、富士の巨大な峰、そしてマリオンの別れの瞳の奥にあった光

輝くものの実体は何であったのかと。冒険と科学、奉仕の旗がはためいたこの奇跡の日々、若者たちが、自らの肉体と自我をはげしく打ちつけ、汗と涙で得た、かけがえのないヒューマニズムの体得と、ユートピアの原体験は、これから比類のない力として、明日の21世紀を開く黄金の鍵に具現されてゆく。日本フェイズの成功により、私にはそう信じる確たる理由がある。

## この国土・自然のすべてに 感謝の気持ちを表わしたい

オペレーション・ローリー日本フェイズはここに終了する。この事業にかかわり得た幸せに感謝するとともに、あらためてこの事業を成功させてくださったすべての人々に、この事業をつつんだ、この国土、自然のすべて、鳥、獣、魚や虫、ひとひらの蝶、散る花びら、一草一木にいたるまで、ありがたしとして感謝の気持ちを表わしたい。皆さん本当にありがとうございました。そして私は、ひそかに想うのである。いま私たちは、50億人からなるこの地球社会の未来へ、ひとにぎりの種子を播きおえたのだと、ひとにぎりではあるが粒揃いの種子をと。すべては明日に望もう。新世紀にむかって、この地球社会に、相互共存の温かくも大いなるムーブメントがおこり、定着してゆく日々にこそ、それは疑いもなく私たちの全力を投じた努力の成果だと、世代の贈りものだと……。されば、また、私たち自身ともどもに、新しい航海へ出帆する真白な帆を縫いあげ、あざやかなエールを書きそえて、人生のマストにいっぱい帆をあげよう。

ひろく ふかく ひとびとと。

# 日本代表派遣青年のページ

## インドネシアフェイズに6青年

# 夢と可能性求めて旅立つ

7月6日からマレーシアフェイズに参加中の志邨建介君、飯島京太君と同じく10日からインドネシアフェイズに参加中の米山達郎君、内藤泰朗君、川村直人君、村橋靖之君、大塚聡子さん、中窪美和さんが出発前インタビューに答えてくれました。

### Q1 OR応募の動機は？

**米山** 自分の実力を試してみたくて。  
**内藤** 夢を追い求めるORの精神に共感して。

**川村** 失われつつある自らの冒険心を呼び戻そうと思って。

**村橋** 自分の可能性を試してみたかった。

**大塚** 探険とジャングルの生物に興味があった。

**中窪** 自分の適応能力を試したかったのと、共同生活を通して外国人と親交を深めたかった。

**志邨** 特別変わったことをしてみたかった。

### Q2 ORへの家族友人の反応は？

**米山** 激励してくれています。

**川村** 無事に帰って来いと言っています。

**村橋** 興味を持って、激励してくれました。

**大塚** 悔いのないように頑張れといってくれました。

**飯島** 学校を含めて、好意的で感謝しています。

### Q3 出発にあたっての不安は？

**米山・内藤・飯島** 特にありません。

**川村** 気候への順応。

**村瀬** 何といても英語です。

**志邨** 考えないようにしています。

### Q4 参加にあたっての抱負は？

**米山** たくさんの出会いを経験したい。

**内藤・中窪** 何でも吸収し、新しいものを発見したい。

**川村** 日本人としての自覚を持って何事にも全力であたりたい。

**村橋** 自分の全てをさらけ出して人間どうしのつきあいをしたい。

### Q5 これまでにした準備は？

**米山** インドネシア語の勉強。

**川村** かくし芸の特訓です。

**中窪** 山登り。

**飯島** ダイビングのライセンス取得。

### Q6 やりのこしたことは？

**川村** 体力増強。

**村橋** 英語、インドネシア語の勉強と体力づくりです。

**大塚・中窪・飯島** 英会話です。

### Q7 現地で何を主眼にするか？

**川村** 自然との一体化。

**内藤・村瀬・中窪** 人とのふれあい。

### Q8 これから出発する人へのメッセージを。

**全員** 荷物は最少限に。

**村橋** とにかく全力で、思う存分頑張ってください。そして、自分を大きくすべく努力してください。

## ジャカルタ発 第1報

7月10日に日本を出発したインドネシア組の大塚聡子さんから、早速現地の様子を知らせる手紙が届きましたので、ご紹介します。

無事ジャカルタに到着後、まずはこちらの暑さに体を慣らすためのキャンプ生活が始まりました。朝のトレーニングのほかは、博物館などの見学と少々の山歩きをしたぐらいなのですが、ここの暑さは、ジリジリ暑いというよりムシ暑く感じられ、体中がベトベトしてきます。バケツでぬるい水をあびるお風呂や、同じくインドネシアスタイルだというトイレにも驚きました。7月15日には船でジャカルタを離れました。船旅は快適で、皆元気です。こちらでは円高の影響というより物価そのものが非常に安く、ジャワ島の東端のスラバヤではインドネシアのベンチャーをオプザーバーにしてショッピングを楽しむこともできました。インドネシア語があまり理解できない私と、完全には英語を理解していないインドネシアのベンチャーの間でのコミュニケーションは少々難しく、時々イギリスのベンチャーの助けを借りることもあります。でも英語がよくできないのはお互いさまですから、私たち日本人メンバーはインドネシアのベンチャーと一番仲がよいのです。船はもう少しでセラウエン島のウジュンパンダンへ到着します。またお手紙しますが、まずは無事にこちらに着いたことのご報告まで。

(7月17日/大塚聡子)

## 「地球のすばらしさ」を実感

4月9日に大阪からゼブ号に乗船し、ダーウィンまでの航海を終えて6月に帰国した、飯塚敏晃君の帰国後の感想をご紹介します。(帰国後アンケートより抜粋)

ORには当初「地球のすばらしさをはだで感じ、成長しよう」と思って参加しました。帰国した今、ORへの評価はすばらしいの一語につきまます。語学力不足のため、本気で喧嘩できずに悔しい思いをしたこともありましたが、当初の願いどおりに地球の大きさ、すばらしさ、偉大さを身にしみて感じる事ができ、どのプロジェクトも有意義で、体験したこと全てが良い思い出です。ただコミュニケーションの一つの手段として、やはり言語は必要ですね。そんな反省の意味もこめて、もう一度ぜひ知らない世界を見る旅をしたいです。(外国人は日本電装の企業内容をよく知っていて、非常に関心も高かったです。)

